

福島県立医科大学リハビリテーション医学講座 林 哲生先生

動画を使った講義で興味を引き付ける

福島県立医科大学や病院での抱負について林哲生先生は「大学では3つの講義を担当しています。講義では動画を使ったり、パラスポーツを題材にしたりして、学生の興味を引く工夫をしています。大学の気風として、ボランティアサークルなどで、学生が自発的に車いす体験や一般向けのイベントを企画しており、彼らが積極的に動く姿を見ると、とても嬉しいですし、頼もしく感じます。将来、なるべくたくさんの学生がリハビリテーション科に関心をもって専門医を目指してくれるように、自分も講義内容をさらに充実させようと考えています。リハビリテーション科は常勤医4名・療法士26名で幅広い疾患に対応し、ロボットなどの先端機器も導入しています。将来的にはスタッフ、特に医師、理学療法士をもっと増やし、患者さんが十分にリハビリテーション治療を受けられる体制にしたいと思っています。」と説明してくださいました。

急性期病院でも患者さんの次のフェーズを配慮する

林先生ご自身の前職の経験を生かした今後の取り組みや構想については「前の職場である総合せき損センター（福岡県）は、脊髄損傷に特化した専門病院で、患者さんをじっくり1年近くかけて診ることができる環境でした。そこでは急性期から回復期、さらに在宅・社会復帰まで、患者さんの長い経過に対して責任をもって見届けることができました。社会復帰した患者さんと何年も外来で顔を合わせ、時には友人のように近況を聞けることが大きなやりがいでした。一方、福島県立医科大学附属病院は日本で3番目に面積の広い福島県でも有数の急性期病院であり、入院は長くて3週間ほどです。患者さんは治療が落ち着くと、すぐに転院されるケースが多く、総合せき損センターとは診療のフェーズが大きく異なります。しかしその分、急性期のうちに合併症をいかに予防し、次の病院や生活期へ、スムーズにバトンをつなぐかが重要です。私はこれまで、長期にわたり患者さんを見守り、社会復帰を支援してきた経験があります。だからこそ急性期の段階から『その先の生活』を見据え、患者さんやご家族に寄り添う視点を大切にしたいと考えています。そして急性期病院ならではの地域連携を活かし、リハビリテーション医療を通じて安心して生活期へ移行できる流れを作りたいと思っています。」と林先生は力強く語ってくださいました。



林 哲生（はやし・てつお）教授

2024年6月より福島県立医科大学リハビリテーション医学講座の2代目教授に就任。リハビリテーション医学、中でも脊髄損傷を専門とし、福岡県の総合せき損センターで16年勤務。完全麻痺患者が上肢機能を駆使し自立・社会復帰する姿に感銘を受けリハビリテーション科医を志す。ロボットリハビリテーションや摂食嚥下リハビリテーション、四肢麻痺・呼吸障害のリハビリテーション診療にも注力。新天地ではチーム医療で治療効果を最大化し地域に根ざした幅広いリハビリテーション医療を推進。

Cozyな医局を目指して

林先生は医局の雰囲気づくりや日常生活について「医局は、ただ仕事をする場所ではなく、皆が自然と集まりたくなるようなアットホームでCozyな場にするよう心がけています。『Cozy（コージー）』という言葉には、単に『居心地がいい』というだけでなく、『温かみがあって、安心できる、ほっと落ち着ける空間』というニュアンスがあります。そういう雰囲気があれば、自然に人が集まり、寄り添い合い、互いに支え合える関係が生まれますし、忙しい中でも気持ちが前向きになります。まだ小さな工夫ですが、お菓子を置いたり、福岡から持ってきたお土産を皆で分け合ったり、ちょっとした仕掛けを大事にしていきたいです。私自身も単身赴任で福島に来てまだ日が浅いですが、テニスクラブに入ったり地元のスーパを楽しんだりして、少しずつ福島に馴染んできたと思います。5年後、10年後には『この医局に来るとなんだかほっとするね』と言ってもらえるような、家庭的で温かい医局をつくれたらと思っています。」と笑顔でお話してくださいました。

（文責：広報委員会）